『沖縄芸術の科学』第33号別刷

日本本土で開かれた
沖縄染織品の展覧会について

新田摂子

2021年3月

日本本土で開かれた沖縄染織品の展覧会について

新田摂子

Exhibitions of Okinawan Textile Collections in Mainland Japan

Setsuko NITTA

The museums in Europe have about 400 Okinawan textiles. It can be presumed that the Okinawan textiles in Europe were collected in mainland Japan before World WarII. The reason for this presumption is that the Battle of Okinawa caused devastating damage to Okinawa's cultural property.

This paper discusses when the Okinawan textile collection was started and who gathered the Okinawan textiles before W.W.II.

Several studies have proved that a researcher from mainland Japan visited Okinawa and collected textiles in the 1920s. Further, some Okinawan textile exhibitions were held in mainland Japan at the same time, and this study found previously unknown exhibition catalogs.

As a result, it can be determined that there were three steps. First, Keimeikai gathered many Okinawan textiles in the 1920s. Second, artists in mainland Japan became collectors of Okinawan textiles after the exhibition of Keimeikai. Third, the Mingei Kyokai gathered many Okinawan textiles in 1939.

1　はじめに

2017 年、2018 年にスイスの Museum der Kulturen Basel、2019 年ドイツの textile museum Krefeld、オランダの Wereldmuseun Rotterdam で沖縄染織品の調査を行った。これらの沖縄染織品のほとんどは、1954 年（昭和 29）～ 1969 年（昭和 44）に、オランダ人美術商 Jaap Langewis より購入された。在ヨーロッパの J.Langewis 資料は約 400 点確認されており、現在約 300 点が調査済みである。

約 400 点もの沖縄染織品を扱った J.Langewis は、どのように沖縄染織品の蒐集を行ったのだろうか。

J.Langewis は、1954 年（昭和 29）Museum der Kulturen Basel に初めて芭蕉の裂 1 点を売った。この年は、多くの人命のみならず、貴重な文化財を消失した沖縄戦から 9 年後であり、当時の沖縄に戦前の貴重な染織品が約 400 点も残されていたとは考えにくい。また、J.Langewis は、東京と京都に滞在していたことはわかっているものの、沖縄まで来ていたことは確認できていない。つまり、戦前に J.Langewis が直接来沖し、沖縄の染織品を蒐集したとは考えにくいだろう。

そのため、ヨーロッパに所蔵されている J.Langewis 資料約 400 点は、戦後 J.Langewis がヨーロッパへ沖縄染織品を販売し始める前に、戦前に日本本土へ渡っていた可能性が高いだろう。つまり、J.Langewis は、戦後沖縄で沖縄染織品を蒐集したのではなく、戦前に日本本土に移動していた沖縄の染織品を日本本土で蒐集し、最終的にヨーロッパへ移動させたと考えられる。

では、沖縄染織品はいつから、どのように日本本土で紹介され、美術品としてコレクションの対象となったのだろうか。すでに小林は、昭和初期における日本本土の画家への紅型イメージの受容について論じている[1]。また、須藤は、鎌倉芳太郎と紅型を取り巻く状況[2]において当時の状況を論じている。

これらの先行研究より、沖縄染織品を日本本土へ紹介した人物として鎌倉芳太郎、日本民藝協会同人の名前が知られている。また、すでにいくつかの先行研究によって、日本本土の百貨店で沖縄染織品の展覧会が昭和初年に行われたことが指摘されている[3]。

本稿は、これまで紹介されていなかった展覧会の図録よりその内容を分析した。その結果、啓明会や民藝協会によって開かれた展覧会以外にも、昭和初期から日本本土で沖縄染織品を紹介する展覧会が開かれていたことがわかった。

2　日本本土で開催された沖縄染織品の展覧会

表 1　日本本土で開催された沖縄染織品の展覧会

番号	開催日	展覧会名	会場
1	大正 14 年 9 月 5 日～ 7 日	琉球藝術展覧会	東京美術学校

番号	開催日	展覧会名	会場
2	昭和 3 年 1 月 25 日～ 29 日	古琉球紅型衣裳展覧会	東京銀座松屋呉服店
3	昭和 3 年 4 月 16 日～ 21 日	古琉球紅型衣裳展覧会	京都四条大丸呉服店
4	昭和 3 年 9 月 6 日～ 8 日	琉球朝鮮波斯印度展覧会	東京美術学校
5	昭和 5 年 1 月 20 日～ 28 日	琉球展覧会	東京日本橋三越
6	昭和 12 年 1 月・2 月	琉球風俗品展覧会	帝室博物館
7	昭和 12 年 7 月 30 日～ 8 月 8 日	琉球と薩摩の文化展覧会	東京新宿伊勢丹
8	昭和 13 年 1 月 6 日～ 2 月末日	琉球染織展 びん型　縞と絣	日本民藝館
9	昭和 14 年 11 月 14 日～ 12 月 25 日	琉球織物古作品大展観	日本民藝館
10	昭和 15 年 11 月 1 日～ 30 日	紀元二千六百年奉祝記念 琉球工藝文化展覧会	日本民藝館
11	昭和 15 年 11 月 12 日～ 17 日	尚順男爵家御所蔵品展観	大阪高島屋
12	昭和 16 年 5 月 17 日～ 22 日	古代琉球染織と時代裂展覧会	東京日本橋高島屋

表 1 より、1925 年（大正 14）から、1941 年（昭和 16）にかけて、全 12 回の沖縄染織品に関する展覧会が開催されたことがわかる。展覧会のタイトルは様々であるが、「沖縄」ではなく、「琉球」という名称が使用されている点が特徴といえる。

これらの展覧会が開かれた会場は、3 つのパターンに分類される。1 つ目は、最初に沖縄染織品の展覧会が開かれた東京美術学校での開催である（1 番、4 番）。2 つ目は、商業施設である百貨店での開催（2 番、3 番、5 番、7 番、11 番、12 番）と社会教育施設である博物館での開催（6 番）である。3 つ目は、日本民藝館での開催である（8 番、9 番、10 番）。以下、3 つの分類ごとに展覧会の図録から、展覧会の目的、所有者、出品物について述べる。

3　東京美術学校で開催された展覧会

（1）「琉球藝術展覧会」

1925 年（大正 14）9 月 5 日～ 7 日、財団法人啓明会が主催した「琉球藝術展覧会」が東京美術学校で行われた。啓明会とは、「1918 年（大正 7）に実業家・資産家の赤星鉄馬（1883-1951）の資金提供によって設立された日本で最初の学術財団法人」である[4]。

鎌倉芳太郎は 1924 年（大正 13）から 1927 年（昭和 2）にかけて、啓明会からの助成を受け、伊東忠太との共同研究として「琉球芸術調査事業」を精力的に行った[5]。

鎌倉は、1925 年（大正 14）5 月に一度東京へ戻った。同年 9 月、「琉球藝術展覧会」が東京美術学校で行われた。この展覧会について、原田は「鎌倉が主に蒐集した約 2000 点とその他借入品を併せて 3000 点。3 日間で 5000 名の来館（1 日 1600 人）[6]。」と述べている。

この展覧会の目録より展示品は、一、文書、二、土俗、三、絵画、四、彫刻、五、建築、六、漆工、七、陶磁工、八、染工、九、織工、十、刺繍工、十一、金石工、十二、楽器、十三、生物の 13 に分類されていたことがわかる。この目録には、資料名や画像などの情報がないため、それ以上のことはわからない。しかしながら、幅広いジャンルの資料が出品されたことがわかる。

この展覧会の目的は、「琉球芸術調査」の成果を公開することであった。同時に、啓明会第 15 回講演会も行われ、鎌倉は「琉球美術工芸に就きて」と題した講演を行っている。おそらく、この 1925 年（大正 14）の「琉球藝術展覧会」が、沖縄の美術を主題とした初めての日本本土での展覧会であった。この展覧会は成功を収め、鎌倉は啓明会より、引き続き研究助成を受けることとなった。

（2）「琉球朝鮮波斯印度展覧会」

1928 年（昭和 3）9 月 6 日～ 8 日には、「琉球朝鮮波斯印度展覧会」が、財団法人啓明会十周年記念事業として、東京美術学校を会場に開かれた。この展覧会の図録には、資料の図版と所有者が掲載されている。表 2 は、「琉球朝鮮波斯印度展覧会」の琉球の部に染織品を出品した所有者と資料名をまとめた。

表２「琉球朝鮮波斯印度展覧会」出品資料の所有者と資料名

所有者	資料名
東京　啓明会	紅型衣裳：2 点
	・白地紅型大模様花鳥文木綿童子単衣
	・水色地紅型大模様花蝶水文木綿女物単衣
	紅型裂：3 点
	・久米伊敷索按司所博染色羽二重裂
	・白地紅型中手模様花鳥文木綿裂
	・花色地紅型大模様花鳥文木綿裂
	紅型見本裂：1 点
	・細模様紅型見本細部
	型紙：9 枚
	図案帖：1 点
	・極彩色風呂敷図案帳（澤岻築登之親雲上作）
首里　尚侯爵家	図案：11 点
東京　尚侯爵家	紅型衣裳：8 点
	・黄色地紅型大模様瑞相文紋綸子女物袷
	・白地紅型大模様花鳥文麻女物単衣
	・黄色地紅型大模様花鳥文木綿女物単衣
	・黄色地紅型大模様花鳥文縮緬女物袷
	・白地紅型大模様花鳥蝶水文女物単衣
	・花色地紅型大模様雲龍文羽二重女物袷
	・黄色地紅型大模様雲霞鳳凰文紋紗女物単衣
	・黄色地紬絣女物袷
東京　岡田三郎助	黄色地紅型大模様花紅葉雪輪文羽二重女物単衣
東京　正木直彦	表花色地裏葡萄色地紅型中手模様花鳥文木綿女物袷

表２より、この展覧会の染織品は、啓明会、首里の尚家、東京の尚家、岡田三郎助、正木直彦から出品されていることがわかる。岡田三郎助と正木直彦は、東京美術学校の関係者で、岡田三郎助は西洋画科の教授、正木直彦は校長を勤めた人物である。

啓明会資料は、先述したように沖縄で調査をした鎌倉芳太郎を通じて入手された。つまり鎌倉芳太郎が直接来沖して蒐集した資料である。また、首里と東京の尚家資料は、おそらく自身が持っていた染織品が含まれていると考えられる。一

方で、岡田三郎助と正木直彦は、来沖して蒐集を行ったのではなく、仲介者によって沖縄染織品を入手した可能性が高い。

以上のように、沖縄染織品が初めて本格的に日本本土へ紹介されたのは1925年（大正14）であり、続いて1928年（昭和3）にも展覧会が開かれている。これらの展覧会は、どちらも鎌倉芳太郎に資金援助を行った啓明会が主催し、1928年の展覧会には尚家資料も展示されていたことが特徴といえる。

この展覧会図録で確認できる染織関係資料は、37点で、紅型衣裳12点、図案11点、型紙9点、紅型裂3点、図案帖1点、紅型見本裂1点である。

啓明会資料16点のうち、紅型衣裳は2点のみで、紅型裂、型紙や紅型見本裂、図案帖など、衣裳以外の資料が多い（写真1）。また首里の尚家資料は全て図案である（写真2）。一方、東京の尚家資料は1点の織物を除いて全て紅型衣裳である（写真3）。岡田三郎助、正木直彦の資料も、紅型衣裳であった（写真4）。

啓明会資料は、紅型衣裳よりも、紅型を生み出す型紙や図案帖などの資料が多い。鎌倉は、紺屋を直接訪ね、型紙や図案帖の蒐集を行っていた。これは、鎌倉の紅型の技法に対する学術的興味からといえるだろう。

反対に、岡田や正木などは、紅型の衣裳を蒐集している。両者は、沖縄の紅型以外にも美術工芸品をコレクションしている。同展覧会の波斯の部、窯工の部において、正木は「草花文染付温壺」外を、岡田三郎助は繍織工の部で「花文モール」他を出品している。つまり、岡田、正木の両者は、沖縄の染織品のみを蒐集していたわけではない。そのため、美術品コレクションの1つとして紅型を捉えていたといえるだろう。

東京の尚家資料は、黄色地の大模様が8点中4点と多く、どれも一級の紅型衣裳である。これらの資料は、現在那覇市歴史博物館が所蔵している。首里の尚家の図案は、図案帖のように綴じられたものではなく、一枚紙の図案であった。首里の尚家の資料は、鎌倉芳太郎が撮影した写真が掲載されている『沖縄文化の遺宝』に確認することができる。しかしながら、これらの図案は現在どこの博物館にも所蔵されていない。おそらくこれら首里の尚家資料の多くが沖縄戦により失われたといえる。

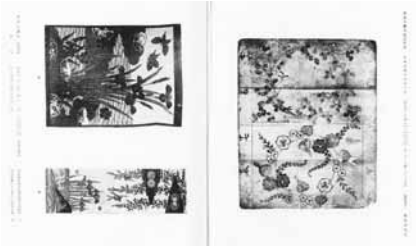

写真１　啓明会所蔵品「琉球朝鮮波斯印度展覧会」琉球の部　pp.20-21

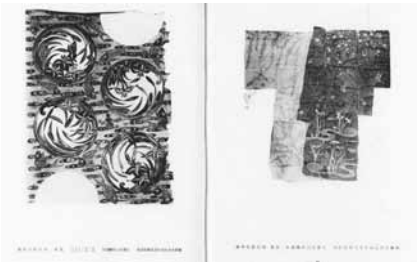

写真２　首里尚家所蔵品「琉球朝鮮波斯印度展覧会」琉球の部　pp.16-17

写真３　東京尚家所蔵品「琉球朝鮮波斯印度展覧会」琉球の部　pp.6-7

写真４　岡田三郎助、正木直彦所蔵品「琉球朝鮮波斯印度展覧会」琉球の部 pp.8-9

以上より、鎌倉芳太郎及び啓明会によって、日本本土に紹介された沖縄資料のほとんどは、紅型関係資料であった。また、かなり位の高い尚家の一級品の紅型衣裳が紹介されていることから、初期の沖縄染織品のイメージは、貴族的で鮮やかな紅型衣裳に集約されていたといえるだろう。

4　百貨店と博物館で開かれた沖縄染織の展覧会

（1）「古琉球紅型衣裳展覧会」

1928 年（昭和 3）「古琉球紅型衣裳展覧会」が開かれた。会場は、1 月に東京銀座松屋呉服店、4 月に京都四条大丸呉服店である。主催は、有尾江皐堂、求龍堂創始者の石原雅夫である。

「古琉球紅型衣裳展覧会」で展示された紅型の一部は、『紅型　古琉球』という図録に掲載されている。『紅型　古琉球』には、紅型衣装の図版の一部 36 点（裂

30 点、紅型衣裳 6 点）の図案が掲載されている[7]。この図録には、実際の資料の写真ではなく、図案を木版刷りにしたものと、原色版印刷、現物が貼付されている資料が 2 点である。表 3 は、『紅型　古琉球』に掲載された、「古琉球紅型衣裳展」の出品紅型についてまとめた。

表 3 「古琉球紅型衣裳展覧会」出品資料の所有者、資料名、素材と地色、形態

所有者	資料名	素材と地色	形態
	古琉球紅型　実物裂地	麻地	裂
	古琉球紅型　実物裂地	木綿地	裂
伊波普猷	琉球王家小裂（2 点）	―	裂
岡田三郎助	梅に霞	赤木綿地	裂
江澤由三郎	桐・鳳凰・牡丹	白木綿地	衣裳
野島熙正	青海波・千鳥・菊・牡丹	白木綿地	衣裳
清水良雄	菊に楓	紺麻地	衣裳
有尾江皐堂	牡丹・松葉・蝶	紺麻地	衣裳
有尾江皐堂	霞・小桜・菊	紺木綿地	衣裳
山村耕花	誰ヶ袖・管笠・桔梗・菖蒲	薄藍麻地	衣裳
正木直彦	鶴亀文様	木綿地	裂
岡田三郎助	菊文様	木綿地	裂
岡田三郎助	花・蝶	木綿地	裂
合田清	麻葉・霞・枝垂桜	薄紅絹地	裂
山村耕花	茄子	緑麻地	裂
岡田三郎助	魔除文様	水浅黄麻地	裂
富永朝堂	雁に梅・楓	藍木綿地	裂
石原雅夫	竹に梅	栗麻地	裂
青山民吉	梅・桜・椿	紺麻地	裂
福原信三	遠山に鶴	紺麻地	裂
倉橋藤次郎	青海波に貝	藍麻地	裂
牧野司郎	笹と梅	藍麻地	裂
野島熙正	牡丹と小桜	藍麻地	裂
西澤笛畝	団扇・梅・楓	藍木綿地	裂

西澤笛畝	薄と蝶に花傘	白木綿地	裂
岡田三郎助	霞小紋梅	紺麻地	裂
岡田三郎助	山に鶴・花に蝶	紺木綿地	裂
鈴木六郎	松・竹・梅	紺麻地	裂
平岡権八郎	日ノ出船に貝	紺麻地	裂
山村耕花	雪輪	萌黄木綿地	裂
山村耕花	蝶・蜘蛛の巣	紺麻地	裂
山村耕花	桐・鳳凰	白麻地	裂
山村耕花	枝垂桜・霞に雁	白麻地	裂
山村耕花	小桜・菊・霞	白木綿地	裂
山村耕花	三階松・小桜	水浅黄木綿地	裂

表３より、この展覧会の紅型所有者には、鎌倉芳太郎と同じ東京美術学校の教員や卒業生の５人の名前がみえる。先述した岡田三郎助と正木直彦以外に、卒業生で洋画家の清水良雄、卒業生で日本画家の山村耕花、西洋木版画家でフランス語講師の合田清がいる。つまりこれらの計５名の東京美術学校関係者が沖縄の紅型をコレクションしていた。

他にも、野島熙正は写真家、富永朝堂は彫刻家、福原信三は写真家、牧野司郎は洋画家、西澤笛畝は日本画家、平岡権八郎は洋画家、他に賛助に日本画家の菊地契月と北野恒富がいる。つまりこの展覧会は、東京美術学校の関係者及び日本本土の芸術家の所蔵の紅型が展示されたことがわかる。

これらの日本本土の芸術家達の多くは、沖縄を直接訪れて蒐集を行ったわけではないだろう。しかし、菊地契月はこの展覧会の賛助をした後、同年６月に沖縄へ取材旅行に出かけ、尚順男爵を訪ねている[8]。しかしながら、岡田三郎助は紅型以外にも、日本の染織品のコレクターとして有名である。そのため、菊地以外の芸術家達は、岡田や正木のように美術品として紅型を購入した可能性が高い。

啓明会の展覧会は、学術調査の公開を目的としていた。一方、この展覧会は、松屋呉服店及び大丸呉服店を会場に行われたことからも、沖縄の染織品を美術品として紹介したといえる。

また、表３より、この展覧会出品資料は、紅型衣裳よりも裂が大部分である。衣裳６点のうち、白地は２点、紺地が３点、浅地が１点である。啓明会の展覧会

のような黄色地は１点もみられない。また、鎖大模様型は１点もみられなかった。裂は、大きさにばらつきがあるため、模様全体を把握することが難しいが、１点を除き大模様型はなかった。

つまり、この展覧会に出品された紅型は、先述した啓明会の展覧会で紹介された尚家資料と比較するとランクの下がる資料であるといわざるを得ないだろう。

最後に、これらの展示品は、どのように蒐集されたのであろうか。この展覧会の図録である『紅型　古琉球』巻頭ページには、

「本図録に収載せる原品の大部分は上里参治氏が八重山に於いて、蒐集せるものに係り東京にては岡田三郎助先生、山村耕花先生京都にては菊池契月先生、北野恒富先生の賛助、東京有尾江皐堂、石原求龍堂後援の下に東京銀座松屋呉服店及京都四条大丸呉服店に於て展覧せられたるものを木版及原色版に付したるものにして」とある。

この八重山で蒐集された紅型とはどのようなものなのだろうか。宮古・八重山に紅型を生産した紺屋があったとは考えにくい。『紅型　古琉球』に解題を寄せた伊波普猷は、これら八重山で蒐集された紅型について、王府の旧柄が首里士族に払い下げられ、さらに宮古･八重山へ払い下げられたものとしている[9]。つまり、『紅型　古琉球』の為に蒐集された紅型は、首里･那覇で生産され、八重山へ移動し、さらに日本本土へ移動されたといえる。

(2)「琉球展覧会」

1930 年（昭和 5）1 月 20 日～ 28 日、東京日本橋三越で「琉球展覧会」が開かれた。この展覧会の図録の前書きには、「今迄琉球紅型や陶器に就ての小展覧会は屢々試みられたれど、琉球文化の全般に渉っての展観は兎に角、今回の此催の他になかったと断言しても差支ないと思ふ。」と述べられている。

出品物は、文書、絵画、陶器、漆器、染織品、楽器、八重山地方の玩具、古銭、植物、食べ物など幅広い。これまでの展覧会にはみられない、楽器、玩具、古銭、

植物、食べ物などが出品されている。

1928 年（昭和 3）の「古琉球紅型衣裳展覧会」と「琉球朝鮮波斯印度展覧会」は、美術工芸中心の展覧会である。そのため、この三越での「琉球展覧会」は、初めての総合的な沖縄文化の展覧会ということができる。

表 4「琉球展覧会」出品資料の所有者と資料名

所有者	資料名	所有者	資料名
啓明会	古代紅型裂地	石丸重治	紅型衣裳 4 点
	紅型型紙図案　15 点	浜田庄司	染物見本（紅型）7 種
	紅型型紙　11 枚	有尾佐治	描絵衣裳
	絣図案　16 枚		紅型衣裳
	絣図案　19 枚	橋本秀二郎	麻地紅型菊花模様反物
	手拭図案　2 枚		芭蕉布赤地縞物衣裳
	墨すり紅型図案　5 枚	平田栄二	琉球麻衣裳
	風呂敷図案集　2 冊		琉球麻風呂敷
	紅型衣裳　3 点	高山エイ	風呂敷
伊東忠太	琉球手拭　3 本	仲本かめ子	紅型衣裳　鶴に花模様
	紅型裂地　4 切		紅型衣裳　白地梅紅葉模様
尚順	紅型木綿藍地桜花模様単衣		紅型衣裳　白地梅模様
	紅型木綿梅花大模様衣裳		紅型衣裳　浅地浪千鳥模様
	紅型葡萄地蝶唐草模様袷		紅型衣裳　白地松竹梅ドヂン
	紅型水草模様袷		紅型衣裳　牡丹と鳳凰模様
	紅型横格子単衣		紅型衣裳　梅模様
	紅型麻白地中型花模様単衣		紅型衣裳　鯉模様
	紅型麻藍地巴模様単衣		紅型衣裳　鶴に下り藤模様（白地）
	紅型麻白地流水模様単衣		紅型衣裳　蕉にブドウ模様
	紅型木綿小裂		紅型衣裳　桔梗模様
	紅型薄藍地木綿単衣		紅型衣裳　桃模様
	毛糸織手縞		紅型衣裳　鶴にブドウ衣裳
尚裕	手縞綿御衣裳（テジマワタンシン）		紅型衣裳　波に千鳥模様
	絽織白地絣衣裳		紅型衣裳　鶴亀模様
	紺絣袷御衣裳		紅型衣裳　浪に梅模様

所有者	資料名	所有者	資料名
尚裕	芭蕉黄地東染絣小裂	仲本かめ子	紅型衣裳　流水に紅葉模様
	礼服綿衣裳ワタジン	井上為一	紅型風呂敷
	花織小裂　8枚		紅型単衣衣裳　9枚
	手縞小裂　3枚		紅型袷衣裳　5枚
尚琳	青芭蕉衣裳	青木君介	琉球木綿風呂敷
	黄地絹浮織衣裳	沖縄県立図書館	青芭蕉衣裳
	麻地紅型松竹梅模様両面衣裳		紅型衣裳
	紅型木綿鶴亀松竹梅模様袷衣裳		黒芋衣裳
	芭蕉紅絣衣裳	浦添朝顯	青芭蕉衣裳
山村耕花	麻紅格子衣裳	山口全則	紅型袷衣裳　末広模様
	麻茶地縦格子衣裳		紅型花模様サラサ
	麻紺地蝶梅模様衣裳		トンビヤン紅染
	麻紺地花笠模様衣裳	瀬長良直	琉球絣紬袷衣裳
	麻紺地茄子模様衣裳		琉球絣紬単衣
	麻薄藍地松梅紅葉小紋衣裳	我部政達	赤地縞芭蕉布衣裳
	木綿流紅葉模様衣裳		赤地浮織芭蕉布衣裳
	木綿薄藍地牡丹鳳凰模様衣裳		
	木綿白地ドジン		
	麻風呂敷（三つ巴一紋付柳にのし模様）		
岡田三郎助	琉球絣衣裳　6枚		
	琉球縞衣裳　5枚		
	麻縞白地		
	紅型衣裳　7点		
	芭蕉布肉筆衣裳		

表4は、「琉球展覧会」の図録より、展覧会の出品物の所有者と資料名をまとめた。表4より、出品者・団体等が増加し、多様化していることがわかる。

なかでも、これまでの展覧会にも出品していた啓明会、尚家関係者、岡田三郎助、山村耕花、伊東忠太などの東京美術学校関係者以外の出品者が他数みられる。芸術家関係では、日本画家の平田栄二、陶芸家の浜田庄司、柳宗悦の甥で美術評論家の石丸重治も出品している。

沖縄側の人物は、山口全則、実業家で三越百貨店に務めた瀬長良直がいる。我部政達は、日比谷高校美術教諭で、戦前に沖縄師範学校に勤めたことのある人物である[10]。我部は他数の琉球玩具を蒐集した人物で、後に沖縄県立博物館が琉球玩具を購入している。

出品物は、図録に掲載されている染織品だけでも 206 点が出品されている。紅型衣裳だけではなく、紅型の裂、織物衣裳、風呂敷などが出品された。この図録には写真が掲載されていないため、具体的な資料の照合などはできない。

しかしながら、山村耕花の紅型衣裳のうち、「麻紺地茄子模様衣裳」は、「古琉球紅型衣裳展」の「茄子」と同じ衣裳である可能性が高い。また、啓明会蒐集品もこれまでの展覧会に出品された資料と重複する資料もあった可能性が高い。つまり、展覧会が開かれるたびに、全ての資料が沖縄から新規に収集されたのでないと考えられる。

このように「琉球展覧会」は、これまでの啓明会の展覧会や「古琉球紅型衣裳展」と比較して、その出品者の多様さが特徴である。啓明会の資料に加えて、日本本土の芸術家のコレクションも広がり、沖縄の人物からの出品もみられた。しかしながら、啓明会や芸術家所蔵の資料は、継続的に蒐集されたのではなく、同じ資料を複数回展示することも行われたとみられる。

(3)「琉球風俗品展覧会」

1937 年（昭和 12）1 月･2 月、帝室博物館で「琉球風俗品展覧会」が開かれた。この展覧会の目録「琉球風俗品陳列目録」の前書きには、第一に風俗画・衣服、第二衣服・装身具、第三には船舶模型・楽器・宗教関係品、第四には衣服・八重山群島その他の品を陳列したとある。染織品以外では、ジィーファーと呼ばれる簪、ハチマチと呼ばれる冠、枕、進貢船の雛形、酒器などが展示されていた。

表 5「琉球風俗品展覧会」出品資料の所有者と資料名

所有者	資料名	所有者	資料名
伊東忠太	花染手巾	鎌倉芳太郎	上衣
	花染手巾		上衣
	花染手巾		上衣
	花染手巾		裳

所有者	資料名	所有者	資料名
伊東忠太	黒色芭蕉御衣	鎌倉芳太郎	裳
	胴衣		褌
	上衣	正木直彦	上衣
宮良當壮	上衣		
	蓑衣		
	ミンサー帯		
	労働着		
	花染手巾		

所有者は、鎌倉芳太郎と、鎌倉と共同調査を行った伊東忠太の名前がみえる（表5）。正木直彦は、「琉球朝鮮波斯印度展覧会」、「古琉球紅型衣裳展覧会」にも紅型衣裳を出品していた東京美術学校の校長である。

この展覧会には、口絵が巻頭にあり、鎌倉、伊藤、正木の代表的な紅型衣裳の写真が掲載されている。正木の「上衣」は、「琉球朝鮮波斯印度展覧会」に掲載されていた「表花色地裏葡萄色地紅型中手模様花鳥文木綿女物袷」と一致した。つまり、正木の紅型は複数の展覧会に出品されていたといえる。

宮良當壮は、国語学者、文学博士、方言学者である。宮良の資料のうち、上衣と蓑衣は石垣島採集、労働衣と花染手巾は与那国島採集と解説に記されている。宮良は石垣出身で、上京し方言研究を行っていた[11]。そのため、これらの資料は、自身の出身である石垣や与那国で直接蒐集されたと考えられる。

この展覧会の最大の特徴は、宮良による八重山資料の出品である。これまでの啓明会主催の展覧会は、首里の尚家中心の琉球王朝美術を紹介する傾向が強かった。しかし、この展覧会では、出品物の対象が広がり、八重山という視点が加わっている。沖縄染織品及び沖縄文化が日本本土で紹介され、受容されていく過程において、首里中心の蒐集からより多様な沖縄文化の理解が進んだといえるだろう。

(4)「琉球と薩摩の文化展覧会」

1937（昭和12）7月30日～8月8日、東京新宿伊勢丹で「琉球と薩摩の文化展覧会」が開かれた。この展覧会の目録の前書きには、目録を編集したのは遊文獻荘とある。前書きには

「黒潮のかをり高き紺碧の海、珊瑚礁に取り巻かれた常夏の南の島、櫻島を擁

し史と景に富める国、学術上幾多研究せらるべき余地あると共に、近時国防上重要なる地点となりつつある沖縄と鹿児島の両県をそれぞれの立場から見直していただきたい為に、新宿伊勢丹七階に於て、七月三十日より八月八日迄、「琉球と薩摩の文化展覧会」を開催いたす事にしました。前者は絢爛たる琉球文化を形成する一つの流、後者は質実剛健の伝統を誇る薩藩が、幕末より明治にかけて文化の先駆をなせる事に一端を回顧して頂きたいためです。」とある。

この展覧会は 1937（昭和 12）の世相を反映し、沖縄について、紺碧の海、常夏の南の島としながら、国防上重要な地点としている。ただ、沖縄と鹿児島の文化との関連性について、具体的にそれ以上の説明はなされていない。そのため、主催者の意図する所を十分にはくみ取れないものの、この展覧会は、これまで開かれてきた「琉球」のみを紹介する展覧会と異なる意図で開催されたといえよう。

展覧会の出品物は、染織品以外に、書画、陶磁器、服飾品、楽器、古銭などである。薩摩側の出品には、薩摩硝子、書画が多く、染織品はみられない。

表６ 「琉球と薩摩の文化展覧会」出品資料の所有者と資料名

所有者	資料名	所有者	資料名
尚裕	黄色地縮緬牡丹形付袷	鎌倉芳太郎	上衣
	水色地麻菖蒲に蝶形付単衣		上衣
	白地木綿亀・桜・紅葉模様形付単衣		裳
伊東忠太	胴衣		裳
	黒色芭蕉御衣		上衣
	上衣	宮良當壮	上衣
	花染手巾		花染手巾
	花染手巾		蓑衣
	花染手巾		ミンサー帯
東恩納寛惇	紅型下衣	遊文獻荘	琉球国中山王明服
	紅型風呂敷		紅型用型紙　５枚

この展覧会の染織品は、先述した同年の帝室博物館の展覧会とかなり類似性がみられる。鎌倉芳太郎、伊東忠太、宮良當壮の３氏は、帝室博物館の展示とこの展覧会の両方に展示品を出品している。両方の図録には、出品物の解説がつけら

れている。

例えば、伊東忠太の「胴衣」は、「琉球風俗品展覧会」では、「現存する琉球紅型の最優秀品といわれている。表は縮緬製、薄鼠地一ぱいに手毬の丸貫紋を埋め、その間隙に桜花及紅葉を散らし、丸貫紋の地は色とりどりにあらゆる花模様を濃艶に描出し（以下略）」とある。

一方「琉球と薩摩の文化展覧会」では後半部分がカットされているものの、全く同様の説明がなされている。つまり、「琉球風俗品展覧会」と「琉球と薩摩の文化展覧会」には、同一の資料が展示され、同じ解説がつけられていた。

伊藤忠太の展示品は、「琉球風俗品展覧会」に出品された 7 点のうち、6 点が「琉球と薩摩の文化展覧会」にも展示されていた。鎌倉芳太郎は「琉球風俗品展覧会」に出品した 6 点のうち、5 点が「琉球と薩摩の文化展覧会」にも展示されていた。宮良當壮も同様に、5 点中 4 点が「琉球と薩摩の文化展覧会」にも展示されていた。

以上のことから、「琉球と薩摩の文化展覧会」は、沖縄と鹿児島の双方の資料を展示する目的の展覧会で、その沖縄側の出品物の染織品は同年帝室博物館で行われた「琉球風俗品展覧会」とほぼ同様であった。

（5）「尚順男爵家御所蔵品展観」

1940 年（昭和 15）11 月 12 日より 17 日まで、大阪高島屋で「尚順男爵家御所蔵品展観」が開かれた。

図録より、この展覧会には、外国からの舶来品、日本の茶道具、陶磁器がメインのようである。しかし、174 まである目録番号のうち、161 から 174 までの 14 点は、紅型と沖縄の織物の名前がみえる（表 7）。

表 7 「尚順男爵家御所蔵品展観」出品資料の資料名

番号	資料名
161	手引木綿花盡シ紅型
162	水色地上布紅型
163	宮古木綿紅型
164	藍地紫入櫻型

番号	資料名
165	水色地貝盡シ型
166	藍地貝花模様入紫紅型
167	藍地流水モミジ模様
168	白地中型
169	小模様紅型
170	藍地蝶型
171	手引木綿白地柳鳥模様
172	菊花大模様紅型
173	婦人訪問着　黄地色絣紬衣裳
174	古代　読谷山小絣入袷衣裳（裏藍地型付）

173 番の「婦人訪問着　黄地色絣紬衣裳」は、1 点のみ織物である。名称から、おそらく久米島紬と考えられる。その他は、紅型である。174 は読谷山花織の袷の衣裳で、裏地が紅型の衣裳である。

この展覧会の図録には、図版や解説がないため、具体的にどのような資料だったのかはわからない。168 番の白地中型、169 の小模様紅型とあるように、大模様以外の紅型が展示されていた。また、地色が明記されていない資料もあるものの、水色地、藍地などが多い。つまり、一番始めに紹介された啓明会の「琉球朝鮮渡斯印度展覧会」の東京尚家資料に比べると、一番の名品とはいえない。しかしながら、尚家からの出品であるため上手の衣裳が出品されたといえるだろう。

（6）「古代琉球染織と時代裂展覧会」

1941 年（昭和 16）5 月 17 日から 22 日まで、東京日本橋高島屋 8 階大ホールで開かれた「古代琉球染織と時代裂展覧会」では、かなり格の高い紅型資料と織物資料が展示された。この展覧会の挨拶には、「本展観には特に御出品を御許し下さいました某蒐集家門外不出の貴重な古代琉球染織品を展列致しました」とある。この挨拶は、京都で俵屋という時代裂専門店を営む、中井敬之助によるものである。

写真５ 「琉球麻地花鳥丸紋紅型ドヂン」

写真６ 上から 「浅黄地琉球草花染模様紅型小裂」、「絹地黄地花鳥丸琉球紅型小裂」、「白地琉球松竹梅模様紅型小裂」

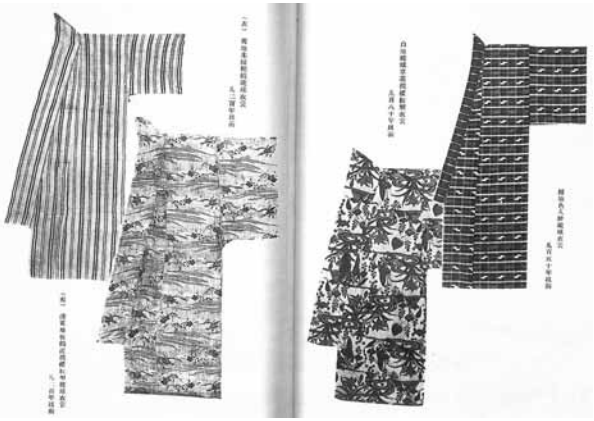

写真７ 右から 「紺地色入絣琉球衣裳」、「白地琉球草花模様紅型衣裳」、「黄地朱綾絽織琉球衣裳」、「浅黄地麻鶴波模様紅型琉球衣裳」

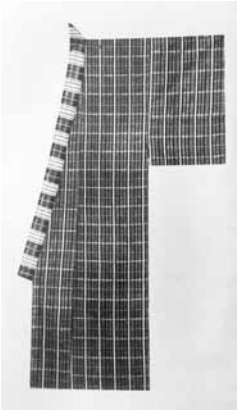

写真８ 「漢東臙脂格子琉球衣裳」

この中井について、同図録には、染織史家の明石染人が、「時代裂と中井さん」という文を寄せている。明石によると、中井は紅型を蒐集するために幾度も沖縄へ訪れているという。

この展覧会は、紅型以外にも、能衣裳や辻が花染の小袖が展示されていた。沖

縄の染織品は、図録に10点掲載されていた。紅型衣裳が3点、紅型裂3点、織物衣裳が3点、てさあじが1点である。

特に注目すべきは、写真5の「琉球麻地花鳥丸紋紅型ドヂン」である。この紅型は大変大柄で大胆な模様構成である。この模様は、鎌倉芳太郎の『沖縄文化の遺宝』に掲載されている「王妃着用菊花文上衣図案」と同柄である。

中井は直接沖縄を訪れているとはいえ、このような王妃レベルの紅型をどうやって蒐集したのだろうか？昭和初期に沖縄を訪れた鎌倉も、型紙などは多く蒐集したものの、このレベルの紅型は蒐集していない。この「某蒐集家」が誰なのかはわからないが、尚家に近い人物の可能性が高い。

5 日本民藝協会

日本民藝協会が開催した沖縄染織品の展覧会は、1938年（昭和13）1月6日～2月末日の「琉球染織展　びん型　縞と絣」、1939年（昭和14）11月14日～12月25日の「琉球織物古作品大展観」、1940年（昭和15）11月1日～30日の「紀元二千六百年奉祝記念琉球工藝文化展覧会」の3つである。

「紀元二千六百年奉祝記念琉球工藝文化展覧会」以外の展覧会は、図録を確認できなかった。そのため、以下は、図録が残されている「紀元二千六百年奉祝記念琉球工藝文化展覧会」について述べる。

（1）紀元二千六百年奉祝記念琉球工藝文化展覧会

表８　紀元二千六百年奉祝記念琉球工藝文化展覧会」出品資料の所有者と資料名

所有者	資料名	所有者	資料名
尚裕侯爵家	白地紅型	日本民藝館	黄色地紅型
	黄色地紅型		藍地紅型
	水色地紅型		白地紅型
	とき色地紅型		水色地紅型
	小豆色地紅型		緑色地紅型
	絣		とき色地紅型
	縞		風呂敷
尚順男爵家	水色地紅型		絣

所　有　者	資　料　名	所　有　者	資　料　名
尚順男爵家	白地紅型	日本民藝館	手縞
	とき色地紅型		芭蕉布
	絽織		絽織
尚且	縞		花織　浮織
	絣		花織手巾
山村耕花	白地紅型		紅型型紙
	藍地紅型		御絵図帳
	水色地紅型		拓本
	風呂敷	山口全則	染織
水谷良一	白地紅型		
	藍地紅型		
	小紋紅型		
	風呂敷		
	絣		
	手縞		
	花織		
	縞		
	絽織		

所有者は、表８より尚裕公爵家や尚順男爵、尚且など尚家関係者、水谷良一、「古琉球紅型衣裳展」にも出品していた山村耕花、山口全則、日本民藝館などである。

尚裕公爵は、最後の王尚泰のひ孫。尚順男爵は、尚泰の４男、尚且氏は、尚泰の孫である。その他の出品者は、日本民藝館のパトロン的存在であった水谷良一である。

以上のことから、この展覧会には、日本民藝館所蔵の 293 点以外にも、尚家からの出品、水谷良一によるコレクション、画家の山村耕花、山口全則など沖縄側の人物達の所蔵品が展示されていた。

６　おわりに

日本本土で沖縄の染織品が始めに紹介されたのは、1925 年（大正 14）に東京美術学校で行われた「琉球美術展覧会」である。この展覧会を契機に、その後５カ所の百貨店と帝室博物館、日本民藝館で沖縄の染織品を紹介する展覧会が開かれた。

それらの展覧会に出品した人物や出品物を分析した結果、啓明会関係者、尚家関係者、日本本土の美術関係者、沖縄の関係者に分類されることがわかった。

1928 年（昭和 3）に行われた「古琉球紅型衣裳展覧会」は、東京美術学校の関係者など在本土の美術関係者からの出品で構成された展覧会であった。続く 1930 年（昭和 5）には、東京日本橋三越で「琉球展覧会」が開かれた。この展覧会は、啓明会関係者（鎌倉芳太郎、伊東忠太）、尚家関係者、在本土の美術関係者（山村耕花、岡田三郎助など）、沖縄の関係者（山口全則など）の全てが出品した大規模な展覧会である。

1937 年（昭和 12）に開かれた、帝室博物館の「琉球風俗品展覧会」と新宿伊勢丹の「琉球と薩摩の文化展覧会」では、啓明会の鎌倉芳太郎と石垣出身の宮良當壮出品の資料他が展示されていた。これらの展覧会の図録を照合した結果、この二つの展覧会には、同じ資料が展示されていたことがわかった。つまり、同じ資料が複数の展覧会に展示されていたのである。

1938 年（昭和 13）以降は、日本民藝館が沖縄染織品の展覧会を 3 回開催している。日本民藝館は、1939 年（昭和 14）に来沖し、多くの資料を収集している。そのため、日本民藝館独自の沖縄染織品コレクションが形成された。

1941 年（昭和 16）には俵屋による「古代琉球染織と時代裂展覧会」が行われた。

以上のように、沖縄の染織品は、大正末期から昭和初めに啓明会によって大量の資料が蒐集され、その後日本本土の美術関係者もコレクションを所有した。その後は展覧会のたびに新規の蒐集が行われるのではなく、同じ資料が複数の展示会に出品されていたこともわかった。加えて、1939 年（昭和 14）に民藝協会一行による独自の蒐集が行われた。つまりこれまで知られていた啓明会と民藝協会以外にも、日本本土の美術関係者、尚家関係者、俵屋、沖縄側の人物によって、沖縄染織品コレクションが形成されていたことがわかった。

そのことは、多くの沖縄の染織品が、戦前すでに日本本土へ紹介され、蒐集されていた事を意味する。言い換えると、それだけの量の染織品が、沖縄の旧所有者の元を離れ、美術品という価値を与えられ、移動していったということである。

はじめに述べたヨーロッパに約 400 点もの、沖縄染織品を移動させた古美術商、J.Langewis は、このような戦前の沖縄染織品の受容があったため、戦後においても染織品を大量に購入することが可能であったといえよう。また、J.Langewis

の蒐集の前年である 1953 年（昭和 28）以降、沖縄県立博物館はコレクションの充実を図るために、大量に本土から染織品を蒐集している。逆にいえば、戦後においても、沖縄染織品は、日本本土の古美術商や関係者に売買・収集されるだけ残されていたといえよう。

現在、ほとんどの啓明会関係の資料は、沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館が所蔵、東京の尚家資料は、那覇市歴史博物館が所蔵しており、沖縄に戻ってきている。日本民藝館の資料は、引き続き日本民藝館が所蔵している。

また、岡田三郎助の資料は、現在松阪屋美術館が、菊地契月と鎌倉芳太郎の資料の一部は、女子美術大学美術館が所蔵している。しかしながら、それ以外の日本本土の美術関係者の沖縄染織品の行方は明らかになっていない。

MKB が所蔵する J.Langewis 資料には、1 点「古琉球紅型衣裳展」を賛助し、実際に沖縄を訪れた画家菊地契月と書かれたタグのついている織物衣裳がある。戦後 J.Langewis はどのように菊地契月のコレクションを手に入れたのだろうか。今後は、戦前に日本本土に移動した沖縄染織品の戦後の行方をたどることで、J.Langewis との関連性をみつけたい。

注

1 小林純子「表象の沖縄 - 戦前期における紅型イメージの変遷 -」『民族芸術』23 号、民族芸術学会、2007 年、pp.81-90

2 須藤良子「女子美染織コレクションにおける沖縄の染織品調査　鎌倉芳太郎と紅型研究をめぐって」『女子美術大学研究紀要』第 41 号、2011 年、pp.56-57

3 小林純子「表象の沖縄 - 戦前期における紅型イメージの変遷 -」、他に、並松信久「柳宗悦と沖縄文化 - 周縁における民芸運動 -」『京都産業大学論集　人文科学系列』第 49 号、2016 年 3 月、pp.365-366」

4 粟国恭子「鎌倉芳太郎と写真 - 琉球芸術写真の文化史 -」『沖縄芸術の科学』第 27 号、沖縄県立芸術大学附属研究所、2015 年 3 月、p.108

5 久貝典子「鎌倉ノートからみた「琉球芸術調査」」『沖縄芸術の科学』第 27 号、沖縄県立芸術大学附属研究所、2015 年 3 月、p.64

6 原田あゆみ「鎌倉芳太郎の前期琉球芸術調査と美術観の変遷」『沖縄芸術の科学』第

11 号、沖縄県立芸術大学附属研究所、1999 年 3 月、p.90

7 国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2586579 http://jmapps.ne.jp/jam/det.html?data_id=571

8 小林純子「表象の沖縄 - 戦前期における紅型イメージの変遷」『民族芸術』23 号、2007 年、p.85

9 伊波普猷「古琉球紅型解題」『紅型　古琉球』巧藝社、1928 年、p.11

10 外間正幸　萩尾俊章「沖縄県立博物館草創期における文化財収集とその背景」『沖縄県立博物館紀要』第 24 号、1998 年、p.54

11 『沖縄大百科事典』下巻　沖縄タイムス社、1983 年、p.607

参考文献

宇宿捷『琉球と薩摩の文化展覧会目録』1937 年、沖縄県立図書館蔵

大阪高島屋『尚順男爵家御所蔵品展観』1940 年、沖縄県立図書館蔵

笠森博繁『財団法人啓明会第十五回講演集』財団法人啓明会事務所、1925 年、沖縄県立図書館蔵

啓明会事務所編『啓明会創立 10 年記念展覧会図録』1928 年、沖縄県立図書館蔵

高島屋美術部『古代琉球染織と時代裂展覧会』1931 年、沖縄県立図書館蔵

帝室博物館『琉球風俗品陳列目録』1937 年、沖縄県立図書館蔵

日本民芸協会『紀元二千六百年奉祝記念　琉球工藝文化展覧会解説』1940 年、沖縄県立図書館蔵

日本民芸協会『月刊　民藝・民藝』不二出版

山村耕花『紅型　古琉球』巧芸社、1928 年、国立国会図書館デジタルコレクション

『琉球展覧会図録』1930 年、沖縄県立図書館蔵

＊この研究は JSPS 科研費 JP19KK0005、国際研究共同強化（B）「在欧沖縄染織品の調査とそのコレクション形成に関する研究」の助成を受けたものです。